# 02 歴史展示の具体的内容
## 歴史ストーリー

# 通史ストーリー

語り部　稗田阿礼

# <通史>　概要

飛鳥時代のおよそ100年間、激動する東アジア情勢の影響を常に受けながら、明日香の地で、日本で初めての本格的な国づくりが行われました。
仏教の伝来とともに国内の権力構造に大きな変化をもたらした6世紀半ばから、藤原京が完成し律令国家が成立する8世紀初頭までの歴史を、時間の流れに沿って紹介します。

## 【１】古墳時代から飛鳥時代へ

仏教の伝来は、ヤマト政権の権力構造に波紋を投げかけます。東アジアの動きを重要視する崇仏派の蘇我氏が、物部氏を退けて政権内での主導権を握り、政治改革を進めていきます。為政者としての支配権力の表現も、古墳築造から寺院建設へと変化していきました。

▼

## 【２】推古天皇と聖徳太子と蘇我氏の時代

隋の中国統一により、東アジア世界に緊張感が走ります。推古女帝と聖徳太子の摂政という体制で、豪族や皇族間の権力争いを鎮めるとともに、隋との対等外交を画策し、国際社会での日本の地位確立を目指しました。冠位十二階や憲法十七条の制定は、大陸の文化に学んだ、天皇を中心とする中央集権体制の試案ともいうべきものでしょう。

▼

## 【３】大化改新から天智天皇の時代

隋から唐への政変の情報は、蘇我氏独裁体制の打倒の動きを引き出し、大化改新が起こります。天皇を中心とする中央集権体制の整備を進める日本は、友好国である百済滅亡に際して、その救援に動きます。しかし白村江の戦いでの敗戦により国家存亡の危機に追い詰められ、防衛力と内政の強化の必要に迫られた日本は、中国に倣った律令体制の導入へと動き出しました。

▼

## 【４】壬申の乱から飛鳥京の時代

壬申の乱は、近江朝廷に加担していた旧来の大勢力を一掃します。この乱に勝利した天武天皇は、神格化される程の大きな権力を握り、天皇を中心とする中央集権体制を確立します。天武天皇は律令や国史の編纂に着手するとともに、律令国家にふさわしい新都の造営も計画します。これらの事業は持統天皇へと引き継がれ、天武・持統天皇の「飛鳥京の時代」に、国家としての骨格が整えられていきました。

▼

## 【５】藤原京から平城京へ

中国と肩を並べる国にふさわしい都城として、694年に藤原京が完成しました。ここで即位した文武天皇は、701年に大宝律令を制定、翌年に「日本」の国号を掲げて遣唐使を派遣します。しかし唐で得た新たな情報は、さらなる新都の建設と大宝律令の修正の必要性を示唆しました。このことは平城京建設、養老律令編纂へと進展していきました。

## 語り部：稗田阿礼（ひえだのあれ）

（生没年不詳）

**略歴**

古事記の編集協力者。
「古事記」の序によれば、天武天皇は、歴代天皇の系譜やそれらに関わる古くからの物語を検討して正しい歴史を後世に残そうと詔し、側近の舎人の中から、当時28歳になる稗田阿礼を選んで手伝わせたという。また、「目に見れば口に誦み、耳に触れれば記憶にとどめた」との記述もあり、阿礼は抜群の記憶力の持ち主であったことがわかる。
「古事記」が完成しないうちに天武天皇は亡くなり、元明天皇の時代に、太安万侶が稗田阿礼の暗記した内容を記録したものが「古事記」であるという。
「古事記」の完成は712年。この年、阿礼は59歳になっていたと思われる。
稗田阿礼の実像は謎に包まれており、古事記の編纂に関わったということ以外、ほとんど記録が残っていない。

# ＜通史＞　映像構成案

## ■映像展開について

歴史の流れをわかりやすく表現するために、絵巻物を見て行くような流れで映像を展開します。左から右へ移動してゆくと時間が現在に近づくように構成された絵巻物を舞台に、映像が展開します。この舞台に、語り部である稗田阿礼が登場し、時間の流れに沿って歩きながら、歴史を解説します。

稗田阿礼の解説に合わせるように、歴史上の出来事が映像で展開されるほか、明日香の歴史にさまざまな役割を演じてきた人物が登場し、その時々の思いをいきいきと語ります。

稗田阿礼は歴史を語るナレーション役としての役割を演じ、その解説の流れに沿って、各時代の主要な人物が、それぞれの「思い」を語ることによって、「多くの人々によってつくられた飛鳥時代の歴史」を映像表現で伝えたいと考えています。

理想的な国家像である中央集権の律令国家へと、古代の日本がどのような道をどのようにして歩んでいったのかを、その歴史をかたちづくっていた人々の声とともに綴り、表現する映像構成とします。

## プロローグ

稗田阿礼が登場する。

自分が記憶力に優れた歴史の語り部であることを自己紹介すると、稗田阿礼を巻き込むようにして、絵巻物が現れ、開いてゆく。歴史を語る絵巻物を舞台にして物語が綴られる。
絵巻物の中に入り込んでゆく中で、物語のプロローグとして、「明日香の地は日本で初めて本格的な国づくりが行われた場所であること、そしてその国づくりには東アジアの情勢がたえず影響を与えてきたということ」を稗田阿礼が語っている。

辿りついた絵巻物の最初の絵は、仏教公伝のころの様子が描かれた東アジアの地図・・・・・。

## 第1章　古墳時代から飛鳥時代へ

6世紀半ばの東アジアの地図の上で語りはじめる稗田阿礼。
稗田阿礼の語る歴史物語が、絵巻物の上に展開してゆく。右へと移動しながら語り、時代が経過する。

6世紀半ば、百済の聖明王から仏像と経典を贈られた欽明天皇の宮は、揺れに揺れる。
欽明天皇は、神の司祭者である天皇という立場から異国の神である仏教の受け入れに慎重で、豪族達に意見を聞くことにする。
「わが国の神の怒りにふれる」と受け入れに断固反対の物部氏。
一方の蘇我氏は「東アジア諸国で信仰されているものを、わが国も受け入れなくては時流に遅れる」と、積極的に賛成する。

実は両者の対立には、天皇を補佐する立場を巡っての権力争いもからんでいた。
対立は何十年も続き、物部守屋と蘇我馬子の代になってついに両者は武力衝突、戦いは蘇我氏が勝利し、日本は仏教を正式に受け入れた。
「仏教は尊い教えであるのみならず、最新の文化、技術が凝縮されている」と語る蘇我馬子。
仏教がもたらす先進文化が国づくりに欠かせないことを、馬子は鋭く見抜いていた。そして彼の発願による飛鳥寺の大伽藍が、飛鳥の地に造営されていく。
飛鳥寺の伽藍が描かれた絵巻の絵の上に、隋が中国を統一した当時の東アジアの地図が現れる。

## 第2章　推古天皇と聖徳太子と蘇我氏の時代

絵巻の上で歩を進め、6世紀末頃の東アジアの地図の上で語る稗田阿礼。

589年、東アジアを震撼させる出来事が起きた。隋が中国大陸を統一したのだ。
朝鮮半島に進出し始めた隋を見て、日本も危機感を感じ、一刻も早く外国と肩を並べる国にならなくてはという機運が高まる。

そんな中、592年に豊浦宮で推古天皇が即位し、飛鳥時代が幕を開けた。
「私に天皇が務まるかと不安ですが、それが国の安定につながるのなら、謹んで役目を果たしたいと思っています」と推古天皇がその決意を語ってくれる。
推古天皇のもと、摂政となった聖徳太子と大臣の蘇我馬子は600年に遣隋使を派遣する。
しかしこの時の使者の口上が、隋の文帝に「非合理的だ」と一蹴された。

大陸とのレベルの違いにショックを受けた日本では、国内体制の充実が緊急課題となり、
603年に冠位十二階、604年に憲法十七条が制定された。
「これらは天皇を中心に、豪族達を一つにまとめるためのものです」
「日本を隋も認めるような文化国家にするためにはまず、豪族に国家の官僚としての自覚をもたせること」と聖徳太子が語ってくれる。

607年、聖徳太子は再び遣隋使を派遣。太子の意を受けた小野妹子は隋の煬帝に、日本も天子を戴く自立した国であることを告げる。この時の遣隋使は成功し、608年答礼使として裴世清が来日、新しく造営された小墾田宮で最大級の歓迎を受けた。
さらに帰国する裴世清について、南淵請安や高向玄理ら留学生が派遣された。
「大陸の先進文化を学んで持ち帰り、いつか日本の土壌で花を咲かせ実をつけてほしい」
彼らを送りだした背景には、聖徳太子のこの国を思う大きな心があった。
歴史絵巻は稗田阿礼とともにさらに先の時代へと進んでゆく。

## 第3章　大化改新から天智天皇の時代

歴史絵巻の7世紀前半あたりにやってきて語り始める稗田阿礼。

推古天皇が亡くなり、629年に舒明天皇が、642年には皇極天皇が即位した。
その頃になると、隋に渡った留学生が次々に帰国し、様々な情報と新時代の息吹をもたらした。
留学僧の一人である旻は、
「隋も、それに続く唐もすごい国だ。日本はまだまだ遅れている。私は学んだことのすべてを、この国に伝えるつもりだ」と使命感に燃えていた。

僧旻に続き帰国した南淵請安や高向玄理も若者達を教え、新時代の機運が満ち始める。
「唐の圧力に屈しないためには、天皇に権力を集中させることが必要です」
新たな時代を担う若者である中大兄皇子や中臣鎌足にとって、天皇をしのぐ程の権力を誇示する蘇我氏の存在が次第に障害になり始めた。

645年、中大兄皇子と中臣鎌足は飛鳥板蓋宮で蘇我入鹿を暗殺（乙巳の変）、中国の律令制を取り入れた政治改革に着手する。大化改新と呼ばれる改革である。
即位した孝徳天皇のもと、都を難波に遷し、「公地公民制」などの4つの方針が打ち出された。
中大兄皇子は、「反発はあると思うが、豪族を国家組織の中に組み入れて、律令国家をつくりあげてみせる」と決意を語る。

都は再び飛鳥に戻り、655年、即位した斉明天皇は都の整備に乗り出した。
「蝦夷や隼人らに都の威容を見せつけて従わせ、国力を増強させるのじゃ」と斉明天皇。

ところが、660年に百済が唐と新羅の連合軍に滅ぼされ、その救援に向かった日本軍が、663年の白村江の戦いで壊滅的な打撃を受けるという事件が起こる。中大兄皇子は緊迫した状況の中で西国の防衛を強化する一方、唐・新羅の脅威に対応するべく、内政改革を急がなくてはならなかった。

中大兄皇子は、667年近江に都を遷し、668年に即位して天智天皇となり、670年にはわが国初の全国的な戸籍である「庚午年籍」を完成させた。これはその後に作られる戸籍の基本台帳となった。

## 第4章　壬申の乱から飛鳥京の時代

歴史絵巻の672年のところで立ち止まり、語っている稗田阿礼。

672年、天智天皇亡き後、大友皇子と大海人皇子が対立し、古代最大の内乱・壬申の乱が勃発した。中央の政治に不満を持っていた地方豪族が大海人軍に味方し、1ヶ月に及ぶ戦いは大海人皇子の勝利に終った。近江朝廷側の有力豪族は没落し、大海人皇子には強大な権力が集中、その存在は神と呼ばれるまでになった。

壬申の乱の舞台から再び歩き出す稗田阿礼。

673年、飛鳥浄御原宮で即位した天武天皇は、「いまこそ聖徳太子が試み、兄（天智天皇）が悲願とした中央集権体制を実現する絶好の機会」と考え、強力に改革を推し進めていく。公地公民制、官僚制、新身分秩序(八色の姓)、律令および国史の編纂、銭貨の鋳造(富本銭)、新都の造営計画などが、天皇とそれを補佐する皇族だけの手で進められた。
（※この国史の編纂のところだけ、阿礼がナレーターの枠から少しだけはみ出して、
「私が天武天皇の命を受けて、古い歴史を習い覚えたのです」とちょっぴり誇らしげに語る）

686年に天武天皇は亡くなるが、その遺志を継いだ皇后の持統天皇によって、飛鳥浄御原令の施行、庚寅年籍の作成、藤原京建設等が着々と進められ、律令国家の骨格づくりはほぼ完成した。
「唐の都にも負けないような藤原京を、ひと目夫に見せたかったけれど、夫の願いを実現することができてよかった」と、持統天皇がその思いを語ってくれる。
推古天皇の時代から目標とされてきた中央集権体制づくりは、飛鳥京の時代に完成期を迎えた。
歴史絵巻の絵が、飛鳥の都の風景から藤原京の姿へと移り変わってゆく。

## 第5章　藤原京から平城京へ

歴史絵巻の694年のころから歩き出し、語る稗田阿礼。

694年、持統天皇は新都・藤原京に遷都。中国にならって造られた藤原京は、5.3km四方の広大な京域をもち、都市計画に基づいて縦横に街路が張りめぐらされた整然とした都だった。瓦が使われた壮麗な宮殿建築は、日本で初めてのことだった。
697年、持統天皇は文武天皇に譲位。701年には刑部親王、藤原不比等らの手によって大宝律令が完成した。中央には二官八省がおかれ、全国は五畿七道に分けられて、国・郡・里がおかれた。人民は国家から農地を支給され、決められた税を納めた。
藤原京を首都として、その命令は全国に行き渡った。
刑法である「律」と、行政法である「令」が揃い、ここに日本は律令国家としての形を整えた。

そして都城と律令の完成、ならびに「日本」という国号を披露するため、33年ぶりに遣唐使が派遣されることになった。
藤原京の政治を担う藤原不比等は、「100年かかって先人達が努力してきたことが、ようやく実を結んだ」と感慨を語り、「これで世界に自信と誇りをもって名乗りをあげることができる」と文武天皇も喜びを語る。

遣唐使が704年に帰国し、さらに新しい情報をもたらした。それによって平城京建設、養老律令編纂への道が開かれたのである。

## エピローグ

歴史絵巻が藤原京を経て平城京に時代が進み、光り輝きながら再び閉じられてゆく。
その前で稗田阿礼が語っている。
「日本が、東アジアを意識することによって、自立した国づくりをめざしてきた飛鳥時代について、おわかりいただけましたでしょうか。
飛鳥時代のはじまりに掲げられた理想は、途中で絶えることなく受け継がれて、ついに日本という国家をつくりあげました。飛鳥時代を生きた人々の思いがこの国のかたちを築いたのです。
みなさんが明日香を歩く時、必死に国づくりに取り組んだ人々に思いを馳せながら歩いていただければ、この阿礼も心から嬉しく思います」